

6・30「学生部結成記念日」

1枚目／学生部結成大会（5枚目の絵の裏に貼る）

1957年（昭和32年）6月30日、東京・港区の麻布公会堂で学生部の結成大会が開かれました。午後一時の開会。あいにく朝からの雨でしたが、昼には晴れ、およそ500名の男女学生が集いました。

登壇された戸田先生は、「学生部は、あらゆる分野に羽ばたくのだ。そうでなければ、広宣流布はただの絵空事になってしまう」と指導されました。

学生部は、戸田先生が作られた最後の組織です。体の衰弱が進んでいた戸田先生にとって、この時の指導は、学生部に対しての最後の遺言となりました。

2枚目／戸田先生の布石（1枚目の絵の裏に貼る）

学生部結成の淵源は、昭和28年4月18日、戸田先生が東京大学の学生を対象に開始された「法華経」の講義までさかのぼります。

多忙をきわめる中で戸田先生は、わずか数名の学生を相手に、難解な法華経を講義し、忍耐よく指導されていきました。

学生の成長と将来の活躍を期待された戸田先生は、人知れず、学生部結成の基礎づくりに励まれていたのです。

3枚目／権力との闘争の中で生まれる（2枚目の絵の裏に貼る）

若き池田先生は、学生部結成大会へ「新しき世紀を担う秀才の集いたる学生部結成大会、おめでとう。戸田先生のもとに、勇んで巣立ちゆけ」と北海道の地から祝電を送られました。当時、池田先生は、「夕張炭労事件」で不当な人権弾圧を受ける学会員を守ろうと奔走されていました。

そして、1957年（昭和32年）6月30日、まさに学生部結成のその日に、大阪府警が無実の池田先生に出頭を命じました。

池田先生は、のちにこう綴っています。

「正義の勢力が、つねに傲慢なる黒き権力から嫉まれ、憎まれるのは、人間社会の一つの方程式であるといつてよい。ゆえに広宣流布の途上にあつて、迫害は必然の法理であり、悲しむよりも喜ぶべき方程式なのだ。

この学会の弾圧のなかに、若き未来に勝利の勝鬨をあげゆく学生部は結成されたのである。

迫害のなかの誕生！弾圧のなかの出現！なんと素晴らしい学生部の原点であったことか」

4 枚目／^{だい}第11 回^{がくせいぶそうかい}の学生部総会（3 枚目の絵の裏に貼る）

1968 年（昭和43 年）9 月 8 日、池田先生は第 11 回学生部総会において、「日中国交正常化提言」を發表されました。

当時は冷戦の真っ只中、日本は中国に対して、敵対的な立場をとっており、国交正常化を語れば、“左寄り”と批判される時代でした。そのような状況下にあつて、世界の危機を憂慮されていた池田先生は、非難、批判も省みず、先陣を切つて日中友好への第一歩を踏み出されたのです。

池田先生は、のちに真情を綴っています。

「私は、仏法者としての信念のうえから、あえて提言に踏み切る決意をした。命を賭しても、新しき世論を形成し、新しき時流をつくろうと」

「学生部の諸君が、私に続いて、友誼の大道を走りゆくことを信じて」

5 枚目／^{せんく}先駆^{がくせいぶ}の学生部（4 枚目の絵の裏に貼る）

今や学生部は全世界で結成されています。池田先生は学生部へ、次のように大きな期待をよせられています。

「皆さんの舞台は、学会の中だけではない。社会である。全世界である。

皆さんは、どこに行つても、どんな人にあつても、あの人立派だな、素晴らしいなど言われるような「知性」と「人格」のリーダーになっていただきたい。

それが英知の学生部の使命である」

“権力の魔性”との闘争の最中に誕生した学生部には、大仏法を根本に師弟勝利の先駆をきる使命があるのです。

決意など